北海道の国際協力情報紙
であい
vol.75 2015 SUMMER
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

座談会：「高校生・アジアの架け橋養成事業」に参加して ～その後

思い出のたくさん詰まった
フィールドノートを手に清野さん

今年で6年目を迎える「高校生・アジアの架け橋養成事業」（平成22年度・23年度の事業名は「開発教育ファシリテーターと参加する国際協力ツアー」）。道内の高校生を対象に実施し、昨年度までに参加した高校生は24校47名を数えるまでに。同事業は6月と7月に事前研修、8月に現地研修、帰国後に2回の事後研修を経て、11月～3月に地域の学校での報告会を開催する約10か月にわたるプログラム。

今号では、一期生の清野真愛さん（北海道文教大学4年）と内田梨奈さん（保育士）を迎えて、当時を振り返るとともに、事業に参加してからその後のお話を伺った。（今後は連載として掲載予定）

自分の変化を感じた瞬間

幼い頃から開発途上国や世界の子どもたちに興味を持っていたが、高校時代にカンボジアに行くと決心できたのは中学や高校の恩師からの激励や応援があったからと語るお二人。事業に参加した率直な感想を聞いてみた。

事業に参加した経験が
保育士の仕事に活きていると
語る内田さん

清野さん：もともと内気な性格で、人前で手を挙げて話したり自分の考えを周囲に伝えるなんてあり得ませんでした。なので、研修初日には間違えた場所に来てしまったと。でも、「みんなに追いつきたい！」と２回目の研修前に心を入れ替え、カンボジアの子どもたちと一緒にするゲームの内容を一人で考えて、それをみんなの前で発表しました。この時点で自分にとっては大きな変化でした。

内田さん：研修初日に大きな壁にぶつかりました。あまりにも考えがかけ離れている仲間がいて、どう受け止めるべきか夜も眠れないほど真剣に悩みました。でも、仲間を信頼して自分が抱えるどんな葛藤も口に出して伝えられるようになったとき、相手の意見を尊重する姿勢が身に付きました。課題が初日に見つかったからこそ、その後の活動に活かされていきました。

スラムの子どもたちの前で力を合せて踊った
「よさこいソーラン」

仲間と一緒だったから乗り越えられた

－10か月間という長丁場ですが、辛かったことはありますか?

清野さん：帰国後はプレゼン資料作成などで忙しかったけど、それよりも仲間に会える喜びが大きかったので、不思議と両立できました。驚くべきはプレゼン能力が著しく向上したこと。人前で話すことなんてなかった自分が、今では、大学のクラスを代表して発表することもあります。すごい力になっていると今でも実感しています。

内田さん：事後研修で指導者の先生に「何を伝えたいの?」と聞かれ、立ち止まってしまいました。「素直に伝えるってどういうこと?」と悩み抜いたからこそ、物乞いの子どもを見たときの心の葛藤を伝えることができました。短期間のプログラムではここまで悩めないと思う。長い時間をかけたからこそあの時の経験を忘れずにいられる。今後も10か月でぜひお願いします!

自分の“全て”に影響していると日々実感

－事業の参加が今の自分にも影響を与えていると感じることは?

清野さん：健康栄養学科に進学したのは、カンボジアの子どもの細い腕を見て途上国で役立つ人になりたいと思ったから。その後、途上国の病院の現状を見たくて旅行会社が主催するスタディツアーに参加したり、学内の国際関係の教授に個人的に連絡したりと、積極性と行動力が身に付きました。お母さんはビックリしていると思います（笑）。あの時使ったフィールドノートは大学入試や文章表現の授業など今まで何回使ったかわかりません。今も就職活動で履歴書を書くときに、当時ノートに書き留めたことを見て活用しています。

内田さん：昔から保育士になりたいと思っていたけど抽象的な目標でした。でも、保育士として世界の子どものことも知りたいと思い、事業参加から具体的な目標に変わりました。カンボジアでは子どもたちと言葉だけじゃない繋がりを実感できたから、日本の子どもにも言葉だけではなく心で「大切にしているよ」と伝えるようにしています。卒園するまで自分が関わるのが1年間でも、私と一緒に過ごした時間が子どもたちの今後に残ればと思っています。あの日々が仕事で全て生かされていると感じています。

当時のノートを見ながら思い出話に花を咲かせる二人

５年前のことを生き生きと話す姿から、事業で過ごした10か月間が二人の中で今も止まらず動いているのだと感じた。自身の変化や成長を堂々と語る姿は大変に頼もしく映った。

世界につながれ、どさん子の心

第9回

世界の人々が集う地域を目指して　～滝川から世界へ　世界から滝川へ～

当協会は、滝川市国際交流協会として1990年、滝川市開村100年の年に、滝川市民総意の下、国際的文化の創造とまちづくりに寄与することを目的に設立されました。全国的に欧米圏を中心とした姉妹都市交流が活発な時代には珍しく、当協会は設立当初から「世界から学ぶだけではなく、世界に貢献する」ことを意識して「国際貢献」も目的に掲げ、事業を展開。1997年の社団化を契機に、国際都市滝川の実現のみならず、5市5町を有する中空知地域全体の発展を視野に入れた多種多様な国際交流・国際協力事業を推し進め、2000年からはJICA研修事業などの国際協力事業に本格的に着手し、多様化する地域ニーズに応え、豊かで活力ある地域社会の実現を目指し、現在は年間40以上の事業を実施しています。

【国際交流事業】

○ジュニア大使訪問団派遣事業

滝川市の姉妹都市である米国マサチューセッツ州スプリングフィールド市並びにロングメドー町に中高生を派遣し、ホームステイなどを通して現地中高生との交流を深め、異文化を直に体感することで、世界に羽ばたく人材としての礎づくりを行っています。これまでに24回実施し、249名を派遣しました。

○インターナショナルフェスティバル

地方にいながらも、ゲームなどを通して様々な言葉や文化に触れ、世界の多様性を肌で感じることで、地球人として生きていく素地を養うことを目的に実施しています。欧米の方達のみならず、アジア・アフリカなど多様な国々の方達との交流を図っています。

○ハロウィンのお化け屋敷

今年で7回目を迎えるこの事業には、道内各地からたくさんのALT（外国語指導助手）の皆さんにご協力頂いています。大人も恐怖におののく本格的なお化け屋敷など、本場を凌ぐ様々なセットが例年大好評を博しています。

ハロウィンのお化け屋敷

【国際協力事業】

○ベトナム・カンボジアスタディツアー

開発途上国の現実を目の当たりにすることで、これまでの自身の生き方や生活の在り方などを振り返り、地球市民としての素地を身につけることを目的に実施しています。高校生以上の参加者が世代を超えて交流を深めることにも定評があります。

ベトナム・カンボジアスタディツアー

【国際理解事業】

○『「国際田園都市 TAKIKAWA」の20年後』プレゼンテーションコンテスト

今年で3回目を迎える本事業は、急速なグローバル化を意識した上で諸課題に真正面から取り組み、地域の新たな魅力を発見し、郷土愛をもって持続可能な地域づくりに自ら携わる意識を育てるために、中高生を対象に実施しています。

○イングリッシュ・キャンプ

2001年に道内では先陣を切って開始した本事業は、市内外の外国語指導助手やJICA研修員等の皆様のご協力を得て、英語力向上と異文化理解への一助として、次世代を担う青少年の育成に大きく寄与しています。

○語学講座（英・韓・中）

レベル別に11コースを開講し、小学生からシルバー世代の方まで幅広い年齢層の方にご受講頂いています。

JICA研修員、市外国語指導助手らとの歓迎交流会

一般社団法人滝川国際交流協会

■〒073-8686　滝川市大町1丁目2番15号滝川市役所6階
■電話：0125-28-8007　■FAX：0125-23-5775　■URL：http://www.msknet.ne.jp/~tiea/

滝川市 平成26年度 多文化共生コーディネーター（事業担当者）研修会

【講　演】「外国人住民のチカラと可能性」
講　師：志渡澤 祥宏 氏
（特活）多文化共生マネージャー全国協議会 監事）

【事例紹介】「在住外国人の人材活用について」
報告者：サムット・トウサリーカセート 氏
（北海道タイドットコム 代表）

サムット氏からの事例報告

志渡澤氏による講演

在住外国人が地域社会を構成する一員となりつつある現状を踏まえ、道民と在住外国人が互いの文化や生活習慣などを相互に理解・尊重し、ともに地域の発展・活性化に貢献する多文化共生社会の実現が求められている。そのようなことから、ハイエックでは、国際交流、国際協力に次ぐ第3の柱として多文化共生推進事業を行っており、講演会のほか、道内各地で活躍する多文化共生コーディネーター（事業担当者）を対象に研修会を実施している。去る、平成27年3月23日（月）、北海道空知総合振興局のご協力のもと、滝川市と共催し研修会を開催した。

研修会は先ず、志渡澤講師より、参加者に人口減少が急速に進行している危機的状況を把握してもらうため、開催地である滝川市の将来人口推移などのデータを紹介することからスタートした。2010年に約43,000人だった同市の人口は、30年後の2040年には約28,000人にまで減少するとともに、更にその内訳をみると地域経済等を支える生産年齢の人口（15～64歳）が今後30年で半分にまで減少する。その問題を解決することは決して容易ではないが、一つの選択肢として、外国人にもっと地域に居住してもらい一緒に地域づくりをすることにより、地域の活性化につなげることができると説明した。そのためには、先ず、外国人観光客などの交流人口を増やすことが肝要で、外国からの交流人口を増やすためには、地域の魅力を外国人住民のチカラを借り、母国等へ発信してもらうことが最善の方法であると加えた。

次いで、タイ出身の留学生として来道し、その後、北海道に在住しているサムット氏から、在住外国人として活躍する自らの活動を説明してもらった。今般、タイからの観光客が急増しているが、実は、サムットさんが一役買っており、北海道の魅力をタイに発信している一人であった。現在は、新篠津村観光戦略アドバイザーとして活躍され、役場と共にタイからの観光客誘致を行っている。「外国人観光客が何を求めているかは、その国の人に聞くのが一番」とサムット氏は体験談を締め括った。

最後にグループワークを行い、地域の魅力を在住外国人のチカラを借りながらどのように発信していくべきかを話し合うとともに、外国人観光客の誘致についてそれぞれの考え方などを共有し、研修会の全てのプログラムを終えた。

韓国国楽ワークショップ&
韓国釜山紹介セミナー（5月21日　木曜日　渡辺淳一文学館）

「韓日国交正常化 50 周年記念公演」のため来道した釜山市立国楽管絃楽団による韓国伝統音楽の紹介と、参加者が韓国国楽のリズム等を体験できるワークショップが、札幌市内の渡辺淳一文学館内講義室で行われた（主催 ： 大韓民国外交部 ・ 駐札幌大韓民国総領事館）。また、ワークショップに引き続き北海道と釜山広域市の交流趣意書締結 10 周年を記念して、釜山を紹介するセミナーも行われ、参加者は伝統音楽や文化など韓国の魅力に存分に触れられる時間となった。

釜山市立国楽管絃楽団の蔡（チェ） 洙満（スマン）楽長によるご挨拶から第 1 部がスタート。楽団は 1984 年に設立され昨年で創設 30 周年を迎え、普段は韓国の伝統を伝えるための活動をしている団体。また、「韓国の伝統音楽は宮廷の主要行事の際、演奏された宮廷音楽と、農民たちに親しまれた民俗音楽の主に2つに分けられています」など蔡楽長によるわかりやすい解説が加えられ伝統音楽の紹介が行われた。

韓国民謡の魅力をユーモア交えて語るジョン副首席

第2部は、楽団員がユーモアを交えながら韓国の民謡や長短（リズム）を楽しく説明し、参加者は両手を使って太鼓のリズムの真似をしたり、韓国語の歌を楽しげに歌ったりなど、絶えず笑いの絶えないプログラムとなっていた。

釜山オリジナルグッズの抽選会で参加者はドキドキ

第3部は北海道庁の文（ムン）国際交流員による釜山紹介セミナー。北海道は韓国の3つの地域と交流をしているが、釜山広域市とは 2005 年から交流を開始し北海道として最初に交流趣意書を結んだ地域（他の 2 地域は慶尚南道とソウル特別市）。釜山の美しい海水浴場や世界的に有名な国際映画祭や花火祭りが美しい写真と共に紹介された。

セミナーの最後は釜山広域市オリジナルグッズの抽選会が行われ、会場はさらに大盛り上がり。参加者が最後まで楽しめる内容となっていた。ゲストの釜山広域市　李（イ）根周（グンジュ）文化芸術課長は、「初めて北海道に降り立ち、自然と街並みが融合して大変美しい街という印象を受けた。釜山は人口約 360 万人を擁する大都会。山も海も美しい街なので、皆さんぜひ来てください」とお話しされ、参加した市民は韓国の伝統文化や釜山の美しさを十分に堪能していた。

開発教育全国研究集会 in 北海道　プレイベント

開発教育教材体験ワークショップ&入門セミナー

4月29日　水・祝　かでる2・7

ワークショップの講師を務める八木亜希子氏

今年8月8日（土）・9日（日）に北海道では初めての開催となる「開発教育全国研究集会」のプレイベントとして、「開発教育教材体験ワークショップ&入門セミナー」（主催：開発教育協会（DEAR））が、札幌市内のかでる2・7で行われた。「開発教育をより多くの人に知ってもらおう」という主旨で実施したところ、学校関係者だけでなく、大学生や道内の NGO・NPO のスタッフなど予定を大きく上回る応募があり、会場は満員に。ワークショップでは参加者同士が積極的に意見を交わしていた。

午後の教材体験ワークショップ「パーム油のはなし～地球にやさしいって何だろう?」は DEAR の八木亜紀子氏を講師に迎えて実施。パーム油は“見えない油”と言われ、日本人も多く消費している植物油脂の一つ。「世界で一番買われている植物油脂は?」（正解：パーム油）、「日本で一番消費している植物油脂は?」（正解：菜種油）などの質問を投げかけ、八木氏の進行でパーム油が身近な存在だと少しずつ気づき始めた参加者。他にも、4枚の写真を使った紙芝居や、パーム油開発に関わる村人や会社員の役割を演じるロールプレイなどから、自分たちの暮らしとパーム油の繋がりの深さを徐々に実感していける内容になっていた。

最後に八木氏は、「知らないうちに消費しているパーム油。南の豊かさを北が搾取している現実から、開発や経済について考えるきっかけにしてほしい。また、ワークショップではそれぞれが違うことを感じて、それを持ち帰り、身の周りのことに目を向け始めることが大事。答えは一つではない」と伝え締めくくった。

4枚の写真からパーム油開発について考える参加者たち

ワークショップに引き続き、岩崎裕保氏（帝塚山学院大学元教授）によるレクチャー「開発教育って、ESDってなんだ?」も行われ、参加者は開発教育への理解をさらに深めていた。

開発教育とは

私たちの生活と無関係ではない南北格差・環境・紛争・貧困など、地球上で起こっている諸問題。開発教育は、ひとりひとりが、開発をめぐる様々な問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会作りに参加することをねらいとした市民による教育活動。
（開発教育全国研究集会 in 北海道 案内より抜粋）

さっぽろ留学生日記

夢はシンガポールと日本を繋ぐ二言語併用の本を作ること

ゼン　シアック さん
シンガポール共和国
（北海道大学　現代日本学プログラム）

原点は母親が読んでくれた一冊の本

現在21才のゼンさん。シンガポールの工専（コミュニケショーン専攻）を卒業後、北海道へ。卒業前に日本で留学したいと考え、インターネットで調べたところ北海道大学の「現代日本学プログラム」を見つけた。日本に興味を持つようになったきっかけは、幼い頃、母親が読んでくれた英語版「窓ぎわのトットちゃん」。その物語を聞いてから日本に関心を抱き、中学校や高校のときは、「スラムダンク」や「ジョジョの奇妙な冒険」の漫画に夢中になり、日本への留学を決心したとのこと。ただ、留学前に知っていた日本語は漫画の中の表現だけだったが、シンガポールで英語を第一外国語、自分のルーツである中国語を第二外国語として学んだので、漢字にはそれほど苦労がないそう。きちんと日本語学習を始めたのは昨年の10月からだが、このインタビューの日本語でのやり取りも全く問題なし。一生懸命日本語を学んでいる成果がすでに出ていた。

北海道大学での勉強

「現代日本学プログラム」を受講している留学生はゼンさんを含め16名。アメリカ、アイルランド、フィンランドの欧米出身の学生や、インドネシアやベトナムなどアジア出身の仲間がいる。このプログラムの魅力は、英語と日本語の2言語併用で学べるということ。最初の2年間は日本語学習の他に、英語で政治経済学や文化人類学の講義を受講。後半の2年間は希望する学部に入り全て日本語で学ぶ。「日本で留学する場合、理系分野の大学院から入学するケースが多いが、文系の学部から入学ができ、しかも日本語力を問わない珍しいプログラム」とゼンさんが説明してくれた。

シンガポールでも有名な北海道

今までの生活の中で楽しかったことを尋ねると、「憧れの雪を初めて見て、冬の生活を体験したこと」と答えてくれた。8月には祖父母がシンガポールから旅行に来るので、富良野に一緒に行き、夏の北海道を楽しむ予定。その他にもスープカレーや生寿司など北海道グルメも少しずつ堪能中。母国では食べられない「ロッテリアの絶品ベーコンチーズバーガーもお薦めです」とにっこり笑顔で教えてくれた。

将来の夢は、日本のライフスタイルやグルメを紹介する二言語併用の雑誌を作ること。北大での勉強や日常の生活が、夢を一歩ずつ手元に引き寄せているよう。ゼンさんが作る雑誌がシンガポールと北海道を結ぶ日もそう遠くないのかもしれない。

札幌市内の百合が原公園で
美しい紅葉を手に

在北海道外国公館・通商事務所等協議会「学校訪問事業」のご案内

在北海道外国公館・通商事務所等協議会では、北海道に所在する各国総領事／領事が、道内の中学校・高校に赴き、自国の情報や日本とのつながり、総領事館の業務などについてお話をする「学校訪問事業」を実施しています。

総領事／領事の派遣に係る移動交通費等の経費は原則不要ですので、学校関係者の皆さまはぜひ積極的にご活用ください。

「学校訪問事業」の概要

（1）対象学校等

北海道内公私立中学校及び高等学校（札幌市内は小学校も対象）

（2）講演内容（例）

①自国についての特徴的な情報
②総領事館／領事館の機能、および総領事／領事の仕事について
③学校側からのリクエストによる事項
④学校側（生徒）からの発表、報告など

（3）派遣可能公館

在札幌大韓民国総領事館、在札幌アメリカ合衆国総領事館、在札幌ロシア連邦総領事館、在札幌中華人民共和国総領事館、在札幌オーストラリア領事館

（4）申込方法

下記事務局へお問い合わせください（各総領事館／領事館に直接お申込みできませんのでご注意ください）

お問い合わせ先
在北海道外国公館・通商事務所等協議会事務局（（公社）北海道国際交流・協力総合センター　交流・協力部内）
TEL：011−221−7840　FAX：011−221−7845

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2015年6月10日
TEL. 011(221)7840　FAX. 011(221)7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp（交流・協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社